

佐伯と国水田独歩 (二)

賛助会員 山内武 麟

(承前)

九日 (明治三十六年十月、鶴谷学館着任数日後—續前)

昨日早朝収二と共に寓居を登り尺間山を志して遠行の程に上る。尺間山は佐伯を去る西北三里に在る高山なり、絶頂に祠あり尺間神社と称す。

頂はこれ石巖々たる難山なり。元として秀立し、四方の群山を脚下に瞰視す可し。東方大洋を望み、三方は連山波濤の如く肥州日州に連なるを視る。

咽ぶ溪流、樹陰の茅屋、山谷の小民、其の生活、樵夫、牧者、余が観ることを希ふ者は只だ大なる、美なる自然と、深意あるシンプルライフのみ。

大山高岳に登り、人寰を脱して無言漠々無窮幽玄なる自然と面々相接する時は余は実に言ふ可からざる暗愁を催すなり。昨日も亦た其の如し。余はウオーズウォースの詩想に由りて、自然と人生の調和を得たることを信ず。而も此暗愁は容易に拂ふ可からざるは何ぞ也。言ふまでもなし余は未だウオーズウォースの詩想を十分深く味はざるが故なり。然らば則ち吾も未だ低い哉。
ア、 シンプル、ライフ。而して此の大自然、泡

沫の如き人の命、而して此大宇宙。

生くる者は人のみに非ず。見よ、鳥や、蟲や魚や、凡て皆然り。死する者は人のみに非ず。見よ魚や蟲や鳥や悉く然り、ア、生物、其の意味は如何、其の望は如何、其の目的は如何。

余が幽思は峯を降り、谷に下り、雲を仰ぎ海を望む間も常に此の如き也余は只だ大調和とのみ観出さんと希ふ。

昨日路傍で見たる彼を樂しげなる一族に宿る詩神の調和の声、如何、彼の山谷に出遇ふたる老いたる樵夫と其の前を尊きたる小兒の上に住む詩神の深き声は如何、遠山の絶頂より立ち登りし晚烟に住む詩神如何、千百の山谷の千百の村落に住む詩神如何。

多くの人間は無窮の自然の中に、吾が想像の谷間に充つ。此の谷間の此の人と此の無窮の自然とを調和する詩神の声如何、ウオーズウォースは何と聞きたる、グレイは何と聞きたる、カライルは何と聞きたる、エマルソンは何と聞きたる、ゲーテは何と聞きたる、吾は何と聞く可き。

山谷にも悲事は絶へず。詩神の幽音は之と何と歌ふぞや。嗚呼余は想像の靈妙なる翼をかりて詩神の琴線を逐はん。

尺間登山記であり、その感想記である。山上のすばらしい眺望は、さすがの独歩も驚いたことである。頂上の雄大な眺めを端的にうまく表現してある。

咽ぶ溪流の水音、谷間に見えかくれする茶藨きの民家、そこへ住む人々の生活など、見るもの、聞くもの、想像するものから、詩情が湧いて来たのである。しかしウオーズウォースの詩のようなものが生れて来ない。その焦燥があらわれている。そこに暗愁を催す原因があった

乃ではあるまいか。それでも谷をめぐり峯を陟り、自然の中を溶け込んで大調和を親出せうとする気持をよく表わしている。

十一月 昨日今井忠治、田村三治両氏より書状来る。

今井氏に返書を認め、天職の容易になり難きと言ふ。田村三治氏に返書を認む。

自ら思ふ、事を成さんと欲せば為すに在り、義務は義務なり、尽さざる可からざるが故に義務なり、故に尽さざる可からずと感ぜざるは義務の念乏しきことと謬す者也。由りて思ふ、吾今信仰深しと。

何故に信仰深きか。神を信ぜざるに非ず、大に信ず、只だ神を思ふこと少なきなり。何故に神を思ふこと、少なきか。シンセリテイならざればなり。何故にシンセリテイならざるか。瞑想、冥想、の足らざればなり。「シンセリテイ」の全くなきを憂へず、常にシンセリテイならざるを憂ふ。多くシンセリテイならざるを憂ふ。

克己の念足らず、道徳の心足らず、奮励感激の情足らざる所以の者、一にシンセリテイならざるに帰す。

今井忠治氏は山口中學校時代からの友人であり、田村三治氏は東京専門學校以来の友人であった。独歩は友人知己によく手紙を書いていた。自分の心持や考えたことを友人に報せたかたからであらう。

信仰の念が浅いと反省している。それは自分が常にシンセリテイでないからである。反省している。清教徒的な真面目な生活に徹したいと念じている。独歩はよくこの「シンセリテイ」という言葉を使っている。この言葉

を独歩は色々と解釈してあるが、これは、誠意、誠実、真摯と訳す言葉である。

十三日 類

習慣の昏睡より人心を醒起し、吾人を困む此世界の驚く可く愛す可きを知らしむこそ「詩」の目的なれ。更らば一步をすすめて言へば人として自らを此驚く可き世界の中に見出さしめ神の真理の中に入生の意義を察明せしむるこそ余が詩人としての目的なれ。

然らば先づ自らを猶ほ一層、強く深く神の言なる此驚く可く愛す可き世界に見出し、己れの周囲の社会、市街、村落、男女、草木、泉流、夕陽、鳥雀、炊煙、雨声、凡てを此驚く可く愛す可く不可思議なる世界に見出す可し。

更に言へば爾自ら一層強く醒めよ。

されど憐れむ可き人性、

眠りから醒まして、この世界が驚くものであり愛すべきものであることを知らせるのが、詩の目的である。更に言へば、人はこの驚くべき世界の中に、生きている自分を発見させ、その神秘な神の真理の中に、本当の人生があることを自覚させることが、詩人のつとめである。

世の中の森羅万象、凡ての中にこの驚く可く愛すべき自然の真髄を見出さなければならぬ。それには強く目醒めて世界を見直さねばならぬ。しかし中々おぼつかしいものである。——と記してある。詩人として自分がどうなればならないかと自覚したのである。

十四日

夜已に爰に爰に。吾今坐して青燈の下に在り。洪水去りて天地ひとしほ寂寥を加へぬ。暗夜、風声しきりにして雲漢々たるを思ふ。滴々の音自から幽

有る者之水雨声に非ずや。蟋蟀の音亦は何処にか聞
かる。

嗚呼吾今坐して茲に在り。深夜は沈思を与へ、沈思
は感慨を増さしむ。

吾再び繰返さんかな。「されど憐れむ可き人性」。

嗚呼 Poor human nature!

吾、日々何を為し、吾日々何を思ひ、吾日々何を
企て、吾日々何を望むぞ。

為すなきの日は過ぎ、思ふなきの日は去り、望み
なきの日は過ぐ。只だ夫れ漠々として今日よ明日よ
と送るのみ。空なる哉。憐れむべき人性。

鬱勃として感慨徒らに昂かれども何と記す可きか
を知らず。

吾如何にして為すべき事を為す可き。只だ自立し
て以て劣甚し、自信して以て為すにあり。

されど憐れむ可きは人性。弱し、愚なり、鈍し、
虚なり。忽ちにして自ら失ひ、徒らに自ら陥りて而
して要するに自ら之を悟らず、凡俗の虚相に交はり

て迷徒の頑皮に媚ぶ。憐れむべき人性。
何故ぞや。人性終に此の如きか。然らば人性は空
なり。

神を思はざるの罪のみ。罰のみ。人生は空に非ず、
賞と罰也。(以下略)

十七日の記にもあるが、佐伯地方に文洪水があつた。

十月九日の午後から雨が降り出し、十三日の夜には颯風
が襲来して、大雨、大風となつてとうとう大洪水となつ
た。そして池船橋も流失してしまつた。佐伯市史の年表
にも載っている。

颯風の去つたおとりの静寂さ、殊に夜半の情景をよく描
写している。静寂の中に沈思して胸に滲き上がる感慨を

赤襟々に記してある。

自己の日々の生活を反省して、為すところなく、深く
思考することもなく、平々凡々と暮している生活を自ら
責めている。若い人には似合わない程、強く自己反省を
している。

十七日 朝

雨、始めて晴れて天地再び光の衣を被
る。計算すれば一週間の降雨なり。先週、月曜日の
午後より始め、今朝に至りてはじめて日を見る。金
曜日の夜より大雨と強風と起り、土曜日に大洪水来
る。其の日十時十一時頃を以て満潮の時となし、最
も洪水の甚だしき時なりしなり。

日々後業を続ぐ。読書の暇殆んどなし。故に時々
沈思を得るのみ。以て精神理想の糧と斂がざる得。

妻に教ふ可き生徒あり、交はる可き有志家あり、
思ふ可き朋友あり。慮かる可き両親と舎弟とあり。
之れ目下、吾が周囲に存在する処の社会的關係なり。
是が世間的關係なり。

門を出れば小都會あり、郊外一步を転ずれば山
河の蒼々たるあり。茅屋の點綴せるあり、仰ぐに無
邊の天空悠々として連なり。顧みれば不冬は自然は黙
々として回ぐる。これ吾が超然的關係なり。此世間的
關係なり。吾今茲に立ち茲に在り。而して吾が關係
は則ち此の如し。

吾を苦しむる者は實に此關係に処する道なり。多
くの俗慮や、もすれば社会的關係の上より起り。名
づけ難き幽愁は往々超然的關係の上より起す。
俗慮に在らざれば幽愁、幽愁に在らざれば俗慮。

未だ容易に眞実なる満足に達せざる能はず。眞実なる
なる平和に居る能はず。未だ十分己れ自らを此自然
の大界、神聖なる靈境の中に入見出す能はず。未だ
十分己れのソールを思ふ能はず、故に他人のソール
をも思ふ能はず。未だ十分日々カストムを離るる
能はず。

己に此の如し、而して自ら此の如きを知る、則ち
不徳の精神暫時も止まず。

今日及計らず新嘗祭（共神嘗祭の間違ひ）の休日なり
しを以て午後、收二と共に城山の後より下村の山
谷を涉り、小坂を越へて坂の浦と称する海浜に出づ、
其れより山麓、海に尽くる処の断崖の下をゆき埠頭
にめぐり出で、滯宅す。路に草刈る乙女の群を見、
畦を行く夫妻の農夫を見、谷間にあつまる小村を見、
溪流を見、紅葉を見、嶋嶼を見、碧海を見、自帆を見、
漁舟を見、長へに送る夕陽を見たり。其の美を
認めざるに非ず、されど一種の幽愁は暫時も脱する
能はず。調和を失ひたる如く絃線を絶たれし如く、
泉流の枯れし如く、吾が心裡、少しもあきたらず、
何者を見能はざる如く何等の暮か、吾が前頭に乗
るゝ如く感じぬ。言ひ換ゆれば遂にミュージズの一曲
をも聞く能はざりし也、ミュージズの在る処を見能は
ざりし也。

何故ぞ也純全、シンセリテイなる能はず、全然、
其の見る処の者を神聖なる世界に見出す能はずして、
吾自ら己に幾分の同化を何れか有つを以て
故におらざとせん也。

本日は旧曆九月八日なるが故に月漸く美し、收二

と共に藤暮郊外に出でんとして道に薬師寺育造氏と
云ふ、当地基督教会の監督者に出遇ふ、吾が宅を訪
はんとて出掛けしと云ふ。則ち共に散歩す、行く行
く当地の教勢を聞くを得たり。

周囲の人との交わりである社会的關係、世間的關係に
煩わしさが有り、取りまく自然は言うに言わぬ幽愁
を感ずる。人々に對しては、未だ充分な眞実を尽すこと
が出来ず、自然に對しては、その中に本當に溶けこむこ
とが出来ないと苦しんでいる。

神嘗祭の日の午後、弟收二と共に城山の後から、自瀧
の前を通つて、坂ノ浦峠（今日立派な道路が通じている
が、昔は小さい坂があった）を越して坂の浦へ行つてい
る。そして妙見塚の鼻を岸辺づたいにめぐり、葛に出で
滯宅して居る。

この散策の道すがら次々と色々なものを見て、その美
しさを感じたが、何か心の中につくりしなないものが残
る。これは自分にはまだ自然の眞の姿を見ることが
出来ないのだと悲しんでいる。それは自分が眞實にそれ
切れなからだと悩んでいる。

夕方の散歩の途中薬師寺育造氏と遇い、これがこの後
間もなく散歩が佐伯の教会へ通うようになる機縁となつ
た。
薬師寺育造氏は、関西学院の出身で、キリスト教徒で
あり、佐伯の教会の監督者であった。この人は後年台湾
に渡つたが、土匪に襲われて殺された。

二十日 十七日筆を置きて怨ちにして三日過ぎぬ。

自己に落古夜己に更け渡りぬ。日々職業は日々務
られぬ、一の決心あり。そは此の度心ならずも受任
せし此教師を責任ある大任と信じ青年を感化するこ

とに力を尽す可し。との決心なり。

教師という職が、責任ある大任であることを深く自覚し、自分の全力を捧げて、必ず青年たちを感化して見せると一大決心をしている。独歩は授業には、いとも熱心で生徒を鍛い上げる方であった。生徒が教えたところを知らないと言ったら大変で、そんな苦はないと目をむき出して叱ったという。独歩は我が強く、負けず嫌いであったので、授業の時生徒の方からぶっつかって来ないという気に入らなかつた。独歩は生徒を激励するつもりで、佐伯の青少年は気概が足らぬと励ましていた。

二十一日 夜半 昨夜当地に來りて始めて教会堂に

出席す。会する者、吾等兄弟の外四人、

怪しげなる一室に此少數が声を張り上げて歌ひ、涙をのびて禱る。少數と雖も其壯嚴なるを失はず。

独歩が佐伯に來て始めて教会に出席した。この頃の佐伯では基督教信者は少數であつた。

二十三日 吾今ま午後の授業を終へ、帰り坐して茲

に在り。暮雲ものさびしく黄昏の気静かなり。

近來筆採る事まれなり。然らば感ずる事少きか。否な、見る者少きからず、感ずる処亦甚だ多し。只筆採る機会少なきなり。

二十一日午後三時半頃より收二を伴ふて山に登る。

是れ窓外を望みし時遠山極めて近く現はれ、秋の気高く空の色極めて澄めると見ればなり。由て夕陽の美を得んことを望みたればなり。

眼下に見るす佐伯市街、山々ばかりと遠く落輝、河流、空色、遠海、四國地の煙山、或は山谷の村落、或は岸辺の孤帆。

悉く吾をして大なる自然、美なる自然と、人生とを連感対感せしむるの體ならぬはなし。吾をして人類を思はしむ。吾をして歴史を思はしむ、吾をして生死を思はしむ、或は人類を導く大人英雄を思はしむ、或は人間一生の運命を思はしむ。(中略)

二十二日は日曜日、早朝收二を伴ふて銚子淵に向て出發す。

二十一日の午後、夕暮近くなつて弟收二と連れ立つて城山へ夕陽を見に登つてゐる。それは窓の窓から見た秋空が、よく澄んで遠い山がほつきりと見えるので、城山山の夕陽はさぞかし美しいだらうと、それを見ようと登つたのである。澄み切つた秋空に映ゆる景色はとて美しかつた。落日も美しかつたに違いない。

独歩はこの大自然の美に接し、人生への思いに馳せている。人類を思い、歴史を思い、生死を思い、英雄を思い、人間の運命を思つて、人生に於ける諸々の複雑な人間關係と、無限無窮の大自然の靈妙さとの関連について思索してゐる。

二十二日の日曜日には、收二を連れて、中野小川の銚子淵に出掛けて觀賞してゐる。

独歩は、何処へ行く時も必ず弟の收二を伴うて行く。いつも二人で歩いていたので、佐伯の町に入ると、二人を「おみきすゞ」と言つていてたそうだ。(つづく)

(報告)

銚子溪谷の探訪

岡本田独歩が二度も探訪した本庄村の銚子溪谷へ、去る十月十九日、佐伯独歩会と合同、直川の歩こう会も合流して行つた。総勢四十六名。史談会は午後さらに上流、芹川の牛の頭大明神まで歩いて、不重堂千氏の兄弟の跡をとむらつた。